



星陵祭の感想

今回から「担任は原則としてクラスの公演に同席する」ことになってしまって、その「原則」を守ると、実は担任は他のクラスの劇がまったく見られないことになってしまうのだが、せめて授業を担当しているクラスの劇は見てみよう、と、25Rの他には、24R、26R、28Rを見てみた。また、入学相談コーナーで中学2年生のお相手をしたら、その2年生と保護者の方が、「劇団四季の原作を見たことがあるので、たいしたことないだろうと思っていましたが、劇団と同じレベルの出来でビックリ！」とおっしゃっていたので、21Rの「人間になりたかった猫」も見てみた。

というわけで、2年生の劇に関しては5クラスのものを見てみたが、今年は敢闘賞の結果通り、21Rのものが一番よかったと思う。ストーリーが単純で分かりやすいから、ちょっと日比谷2年生の演劇としては物足りない感じもしないではないのだが、演技もよかったし、歌も練習の成果が感じられたし、客席に小道具を回して演技の一部を手伝ってもらったり、最後には歌を一緒に歌ってもらったりする、いわゆる「観客を巻き込む手法」も見事で、完成度が非常に高い印象であった。つまり、合唱祭でいうと、ちょっと易しめ、かつ特徴のある曲を選んで、それを完璧に演奏したといった感じであった。

28Rの「ネバーランド」も分かりやすいストーリーで、挿入される英語の歌をしっかりとこなしていたのが印象的。劇中劇（主人公が劇作家で、その人が書いた作品として、劇の中でピーターパンとティンカーベルの話演じる）という設定もおもしろく、それに合わ

せて、幕を二重にはった舞台装置も工夫が見られた。

25Rは、全般にもう少し演技や歌を向上させる余地があったと思う（特に、笑いを引き出すセリフや演技をもっと楽しくやっても良かった）。立ち稽古、通し練習をして初めて見えてくることがいっぱいあるのだから、早くそこにたどり着くことが大切なのに、今回はそこにたどり着くのが遅くて、しっかり磨き上げる余裕がなかった印象である。この経験をぜひ来年の公演に結びつけ、レベルの高い劇を、レベルの高い完成度に結びつけたいものである。それだけの力がある「役者たち」（役者そのものだけでなく、大道具の役者やポスターの役者、音響の役者など…）がいることや、チームワークの素晴らしさは充分に分かったはずだから、次回はそれぞれの個性を生かしきる計画をたて、それを実現して星陵大賞を目指そう。

ところで、帰りがけ、審査員の卒業生に会ったので、星陵大賞が「アニー」ではレベルが低いのではないかと聞いたところ、「確かにそうだが、劇としての完成度がずば抜けていた」とのこと。左欄に「ちょっと易しめ、かつ特徴のある曲」と書いたが、その演劇版といったところか。中学生の来場者が多いことや、審査員も（合唱祭のプロ並みの人たちとは異なり）若い人が多いことを考えると、その辺を踏まえた演目選びが必要かも知れない。今年の健闘ぶりを見ているだけに、来年に向けての作戦立ても楽しいね。